

七里教会 2022年5月15日

「目を覚まして」 テサロニケの信徒への手紙一5：1－11 佐々木佐余子

今朝でテサロニケの信徒への手紙一を終了します。この手紙が執筆された年代は、ADの50年頃なのですが、時代を超えて今を生きる私たちにも強く印象を与える手紙です。まずテサロニケに住んでいるクリスチャンたちの置かれた状況が宗教的多元の中にあるということ。日本も様々な宗教があって昔から八百万の神々があるのです。そういう中で私たちが生を受け、教会に導かれていることは不思議です。またもう一つはテサロニケの信徒たちは迫害の中、身の危険を感じており、主の来臨がこの世に来ることを期待していたことです。主の来臨というのはこの地上に主イエスが来られて救ってくださるという信仰です。その当時は地中海の地域、ローマ帝国の所領する国々が全世界なのでした。今のように他の国々は認識できないのですから。来臨とは別の言葉で言うところの終末ということです。しかし、終末はいつ来るかわからないのです。主イエスも危機感を感じられて言われています。「御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから終わりが来る」(マタイ 24:14)

パウロは5章1節で語っています。「兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。盗人が夜やってくるように、主の日は来るということを、あなたがた自身く知っているからです。人々が『無事だ。安全だ』と言っているそのやさきに、突然、破滅が襲うのです。ちょうど妊婦に産みの苦しみがやって来るのと同じで、決してそれから逃れられません」と預言します。終末信仰は恐ろしいけれど、その反面恵みの時でもあります。日本は平和ですが、その反面、緊張感がないせいか、生活面で無駄が多いような感じもします。パウロは身を慎んでいましょう、と教えます。学生時代を思い出すと、先生が突然言われるのです。「これから小テストをします」。ビックリします。皆「エー」といって「前もって言ってくればいいに」とぼやきます。いつテストがあってもいいように普段から勉強しておかなければならないのですが、なかなかそうはいかないものです。それとよく似ています。イエスさまは譬話をされました。「目を覚ましている僕」の譬話です。ルカによる福音書12章35節です。「腰に帯を締め、ともしびを灯していなさい」と教えます。38節を読むと「主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ」とあります。主人の帰りを寝ないでずーと待っていると、帰って来た主人は喜んで、主人の方が帯を締めて僕たちに食事をさせ自分は給仕役をするというのです。主人とは人の子であり僕たちは人間を指すのです。

ドイツの神学者であり宗教改革者のマルティン・ルターは言っています。「終末には主イエス・キリストが来られるのだから、今、教会を通して主イエス・キリストは来られている。それ故、私たちが救われている今が、終末であると言える。だが、教会といえども人間の集団であるから、教会がすなわち神の国というわけではなく、教会と神の国は同一ではない。であるからみ国が来ますようにと祈らなければならない。キリスト者はその救いをくいま

すでに>とくいまだ>との緊張においてもっている」と言っています。わたしたちは、今主イエスによって救われているので終末時にあると言えるけれども、それは不完全なもので、完全なものは将来に託されているのではないのでしょうか。

この終末信仰によって伝道がすこぶる進展しました。パウロは終末が来る前に世界に宣べ伝えねばならないと、地中海を回ったのです。それで、多くの主を信じる群れが起こされ信徒が増えました。1世紀末には今のトルコを中心にして、数えると37か所もの集会所・教会が起こされ、2世紀には97か所になっているのです。驚きですね。もし、終末信仰がなければどうなっていたでしょう。こんなにはとても増えなかったと思います。主イエスの言われるごとく小さなからし種が大きく育ちました。これは神の起こされた不思議です。埼玉地区のある教会にもこのからし種が大きく育っています。

パウロの時代、ユダヤ教においても終末がどのように来るのかと想像されていました。聖書の外典として知られている第4エズラ書には、このようにあります。「突如として夜中に太陽が輝き真昼に月が照る。その上、木から血が滴り落ち、石が声を発し、人々は恐れ慌て星は軌道を脱するだろう」と書かれています。実におどろおどろしいですね。お化けでも出てきそうです。けれど、最後には「ただあるのはいと高き方の栄光の輝きのみ」と書かれています。同様外典にはエノク書もありますが、その書にはこう書かれています。「丘は蜂の巣のように溶け、陸は口を開け、地はすべて滅びる。神の到来には神の裁きがある。」とあってこれも天変地異が起こることを予想しています。パウロはそのような資料を多分参照したとは思いますが、信徒を恐怖に落とすことなく、終末が来ることによって、かえって主イエス・キリストの救いにあずからせようとしているのです。そのように、主の来臨の日は慌てふためく災いの日としてではなく、待ち望んでいた喜びの日だと伝えているのです。

そして、4節からは非常に励まされます。「しかし、兄弟たち、あなたがたは暗闇の中にいるわけではありません。ですから、主の日は、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。」5節「あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません」と語っていますが、たとえ夜になっても暗闇に属していない。うれしいパウロの言葉です。パウロは信仰に生きた使徒と言えますが、パウロのみではなく、他の使徒たちも信仰に強く生きた生活をしているのは、やはり主の来臨が迫っていると感じていたからではないのでしょうか。

ローマ帝国の異文化の中にあって暮らしているテサロニケの信徒たちは曲がった時代のただ中で、星のように輝いて暮らしてもらいたい、主の来臨が来るまで主の証をして生活してもらいたいと願っているのです。6節に「従って、他の人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう」と教えます。信仰的に目を覚ましていなさいと教えました。

今、ウクライナとロシアが戦争をしていますが、『信徒の友』5月号を読むと詳しく書かれています。そのお話を少しさせていただきますと、「正教国家ロシアを問う」という題で

桃井和馬という先生が執筆されています。先生が言われるのは、ロシアによるこの侵略戦争は、2000年続いたキリスト教史への挑戦だと言われています。ロシアの信じる正教会は政治と宗教が社会の中で互いに補完しあう関係を築いてきた、ということです。ギリシャ正教会、ロシア正教会、ウクライナ正教会が一つの教派として同じ信仰を守ってきたのです。20世紀ごろから世界の正教会で大きな影響力を持つようになってきたのがロシア正教会で、普段は教会に行かないけれど、特別な時には教会に行くので、私は正教徒と思う人が人口の8割いるそうです。日本人とよく似ています。特別な時だけ神社やお寺に行きますから。ロシア正教会で絶大の勢力を誇る人は、キリル総主教ですが、この人はプーチン大統領を支持し、今回のウクライナ侵攻は西側諸国の「露骨なロシア嫌悪」の結果であり、「邪悪な力」によって、抑圧され続けたロシアの権利回復と語って、プーチンを全面的に助けているということです。そして、プーチンはローマ皇帝の権力を手に入れて、ローマ皇帝の再来を目指しているということです。しかし、世界中のキリスト者が大反対して戦争終結のため働いており、カトリックのバチカンも平和の道を模索していて、ウクライナのゼレンスキー大統領もローマ教皇に調停を要請して戦争終結のため働いている、キーウ中心部で続いていた市民のデモを警察と武装部隊が激しい暴力で攻撃していた時、正教徒の聖職者たちは十字架を手に持ち、完全武装の部隊から放たれるゴム弾や催眠ガス、実弾を浴び続け戦ったそうです。修道院は人々の避難所に、野戦病院になって治療をしているということです。そういうことはあまり日本の新聞では取り上げられていないので、日本のキリスト者は思うでしょう。一体正教徒のキリスト者たちは何をしているのかしら、と。でも、正教徒といっても名前だけで、多くは普段は教会に行っていないのですから、本当に正教徒と言えるかどうか分かりません。プーチンもキリル総主教も名前だけ正教徒であってキリスト者とは言えないのではないのでしょうか。

「イエスの誕生から2000年を経た今、キリスト教信仰を利用して巨大国家統治を計る「皇帝」プーチン。一方、理不尽な暴力を前に、キリスト教信仰によって過酷な日々を生き抜いている人々がいる。2000年前、ガリラヤでイエスが誕生した意味は、断じて帝国を繁栄させるためではない。傷ついた人々の心に希望の光を灯すため、暗闇に立ち尽くす人々に生きる力を注ぐためである。プーチンが破壊しようとしているのは、キリスト教と、2000年続いたキリスト教史なのだ」と結んでいました。

パウロは「目を覚ましていなさい」と教えました。本当に信仰に目を覚ましていないと地獄の世界になってしまうのだと感じます。罪のない人々を殺めておいて、一体プーチンはどんな帝国を築こうとしているのでしょうか。どうぞ、早く目覚めて愚かしいことをやめてもらいたいです。